
機械仕掛けの箱庭 ~ The Mechanical Miniature Garden ~

雄堂 椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの箱庭 The Mechanical Mini
ature Garden

【Nコード】

N0221BA

【作者名】

雄堂 柊

【あらすじ】

時は2050年。

日英米三国の共同プロジェクトとして、世界初のVRMMORGが開発された。だがその裏には世界覇権を維持しようとする大国の思惑があった。

世界初のVRMMORGのオープンβテストに集められる三ヶ国合計15000人ものテスターたち。クリスマス夜の夜に響き渡るログアウト不能、デスゲーム開始の宣告。ゲームの期間は一年。ク

リアでなければ、ペナルティとして全プレイヤーに死が与えられる。

デスゲームからの脱出方法はグランドクエストのクリアのみ。

今、格ゲー対戦が好きな少年はβテストに参加した仲間たちとともに歩き始めた。

プロローグ（前書き）

本作の1章にあたる部分については、ほぼ完成しています。
お正月の期間を通じて、下書きを順次改稿して投稿していきます。
よろしくお願いします。

プロローグ

薄暗いがかなりの大きさの部屋の中。

部屋の奥には、かなりの大きさの執務机が置かれ、部屋の中央には大きな来客用ソファが置かれている。部屋の大きさ、調度品の質などからも、かなりの地位を持った人間の部屋だとひと目でわかる。

椅子に座った年配の男が、姿勢良く直立している若い男の前に、腕を組みながら感慨深げにうなづいていた。二人の関係は上司と部下。あえて特筆すべきことがあるとすれば、部屋の中にいる二人とも、軍服を着ていることだろうか。

「……ようやくここまで来たのだな」

「はい。VR構想が始まって約二十年。TMGM計画スタートから見ても十年。ようやく本計画を実行段階のフェーズ3にまでこぎつけることができました」

立っている男は慇懃に答える。まさに教科書通りの軍人といった様子である。

「前世界大戦からすでに百年。世界のいくつかの野心的な国家は、わが国の覇権を狙い、同盟国の保有する権益を脅かす。たわけた狂信者どもはわが国に理不尽な暴力をぶつけてくる。いつの時代も、犠牲になるのは無力な国民たちだ」

徐々に熱を帯びてくる言葉。そこに秘められた感情は、自らが仕える国家への忠誠か？ 庇護すべき自国民への義務感か？ それとも大切なそれらを脅かす憎むべき敵への怒りか？

「これらの脅威に対抗するには、いまやハードウェアとしての兵器だけでは足りぬのだ。ソフト面の最大限の強化、すなわち圧倒的に優秀な人材を軍に安定的に供給することこそが重要なのだ」

「はい。そしてそれこそがこの先の五十年、わが国が世界覇権を維持し続けるための力となるでしょう。自らの命が世界の平和につな

がるならば、本計画の被験者たちも本望なはずです」

椅子に座った男は、わが意を得たりとばかりに深くうなづく。

「そのとおりだ。わが国が世界覇権を投げ出さないからこそ、第三次世界大戦はおきていない。世界はわが国によって管理されるからこそ、平和裡な発展が可能なのだ。その事実を鑑みれば、この程度の犠牲はやむを得まいよ。多少心苦しいものはあるが、被験者たちには今後五十年の平和の礎となってもらおうでしょう」

その言葉に無言で差し出される一枚の書類。

「計画のフェーズ3実施を承認する」

椅子に座った男が、差し出された書類のサイン欄に自らのサインを記す。その書類のタイトルには『The Mechanical Miniature Garden』と書かれていた。

プロローグ（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。
よろしく願います。

1 話（前書き）

本編の第一章の一話目です。
では、どうぞ。

1話

2000年代初頭のIT革命からすでに半世紀。

2050年台に入った現在、ゲームセンターは二極化が進んでいる。

一つ目は、ボーリングやダーツなどのアミューズメントを軸にプレイズゲームなどを配置するタイプの、いわゆる大手が運営する大規模アミューズメントパーク。

二つ目は、格闘ゲームや麻雀ゲームなどを中心に各種対戦を呼び込むタイプの、ゲーム自体を主軸とした昔ながらのゲームセンター。前者については特に言うようなことはない。

いわゆる人生勝ち組なりア充連中が、きゃっきゃうふふする場所だ。店の前を通ると、よく一緒にいる奴なんかは「爆発すればいいのに」とよくつぶやいている。そいつがつぶやくたびに、俺との物理的距離と心の距離が離れていくのは、一応秘密だ。

後者についてはゲーム中毒症、ないしその予備軍の溜まり場だ。

スタンドアロン型のビデオゲームの衰退によって一時期、中小のゲームセンター数は、その数を大きく減らしたもんだった。だけど全国どころか世界中がネットワークでつながった対戦ゲームが出現してから、その復権は始まった。今では近所のゲーセンで、日本はおろか他国の有名プレイヤーとだって対戦できる。もちろんプレイヤーの実力によっては、お前なんかお呼びじゃねーよと、拒否されることもある。

と、ゲーセン談義をしたわけだが、なぜいきなり俺はこんな話を始めたのか。

それは俺が今いる場所と、やっていることに関係がある。今、俺がどこでなにをやっているかというところ……。

「KO! Winner is DAI」

学校に近い場所にあるゲーセンで、バーチャル・ストリート・フアイティング（Virtual Street Fighting）という3D格ゲーの対戦をやった。

通称VSFと呼ばれているこのゲームは、今一番人気がある格ゲーで、当然のようにオンラインネットワークによる世界対戦が可能なゲームだ。

俺はその世界対戦で現在四連勝を挙げていて、さっきの勝利で五連勝に到達したって状況だ。時に有名プレイヤーも参戦する、世界レベルの対戦で五連勝。十分誇れる戦績なはずだ。

俺の名前は笹本大。16歳、高校一年だ。

あだ名は名前を音読みしてダイ。DAIっていうのは、俺がゲームの中で使っているプレイヤー名称、いわゆる固定ハンドルネームだ。

ただゲーセンの中で俺のことをDAIと呼ぶやつはほとんどいない。俺のプレイスタイルと重ねて『DAI乱舞』などと、とあるゲーム雑誌が名付けてくれやがったせいだ。

それからずっとDAI乱舞とばかり呼ばれている。知り合いのゲーセン仲間からさえ、延々とからかわれる始末だ。

それにしてもゲーセン関連の雑誌ってのは、どうして厨二な名前をつけたがるんだろうか？

少し想像してほしいもんだ。ゲーセンに行くたびに――。

「なあ、DAI乱舞。一戦しようぜ」

「DAI乱舞。今日こそはてめーに勝つからなっ」

「おいおい人気者だな。DAI乱舞」

などと言われてたら、恥ずかしくてしょうがない。

つと、あぶないあぶない。また対戦が始まった。これで六戦目か。そろそろ疲れてきたし、負けたら帰るとしよう。

結局、俺が負けたのはあの後三戦してからだった。

連勝補正のせいで、操るキャラの攻撃力や防御力が低下していたっていうのもあるけど、対戦相手自体も相当な腕前だった。連勝補正がなくとも、勝率は五割前後だろう。

プレイヤー情報を見る限りだと、アメリカのプレイヤーらしい。プレイヤー名称はマリィ。名前からすると女の子だろうか？

それはそうと。対戦も負けたし予定通り帰ろうと思うんだが、その前に帰る前に連れを拾っていかにならん。

「おい、帰るぞー」

「ん、ちょっと待ってくれ。こっちもラストステージだ」

「わかった。手早く片付けろよ」

「はいはい、わかってるよ」

連れの名前は水原潤。

俺と同じ高校で、同級生でもある16歳だ。

ガンシューティングが大好きで、かつ異常なほどうまい。今こいつがやってるのも、とある有名メーカーの最新作で三日前にでたばかりだ。

こいつにとってはワンコインクリアなど当たり前で、ノーミスプレイでタイムアタックに挑戦する日々をおくっている。なんでも将来の夢はM I 6で活躍する特殊工作員らしく、その準備として銃を撃つ練習をしているのだとか。いやいやお前は映画の見すぎだ。

ちなみにリア充を見つけると「爆発しろ」とつぶやくあぶない男でもある。ピンチのヒロインを救って、熱いキスを……というこいつの夢は、どうやら遙かな彼方にあるみたいだ。

と、もうクリアか。

さすがに早いな。ボスの弱点を集中攻撃して一気に即殺しやがった。

「さて、こっちも終わったし帰ろーぜ」

「点数は見なくていいのか？」

「ああ。どうせ昨日の点には届いてねーもん。だからどーでもいいさ」

「わかった。んじゃ、帰るか」

ゲーセンから出ると、茜色に染まりつつある秋空が広がっていた。少し肌寒い帰り道を、自販機で買った温かいミルクティを片手に、潤と一緒に歩く。熱狂の渦にあったゲーセンを出た後の、なんともいえない空虚な感覚に、ミルクティの温かさが染み渡ってくるみたいだった。

「そっぴゃ、お前の方は今日の戦績はどーだったんだ？　DAI乱舞さんよ」

「まあまあだな。百円で八連勝だったし。後、DAI乱舞言っつな」
「そいつは諦める。お前のプレイスタイルが変わらねー限り、お前の呼び名も変わらねーよ。誰が見ても、ぴったりの呼び名だしな」

俺の格ゲーにおけるプレイスタイルは、コンボ技を相手が処理できなくなるまで飽和量叩き込むという、完全な先手必勝スタイルである。

対戦相手の中にはガン待ちと呼ばれる、対戦相手の行動を待つて、その行動後の隙を攻撃するだけの奴らもいるが、そういう相手でも俺には関係ない。

なぜなら基本的に格ゲーでの行動は、ジャンケンの関係に似ているからだ。

グーはチョキに勝てるが、パーには勝てない。チョキやパーにしても同じことだ。

つまりガン待ちしているだけの相手は、こちらの正面からの行動以外に対して極端に弱い。ジャンケンで言えばグーしか出さないよなものだ。

なのでその場合、俺はパーを出して相手を崩したら、後はコンボ技で沈めるだけの簡単なお仕事をこなします。本当にありがとうございました。

と、こんな風にしてゲーセンで対戦を繰り返しているうちに、とあるゲームメーカー主催の格ゲー大会で、全国大会にまで駒を進めてしまったのが運の尽き。

全国大会で披露したコンボ技の大バーゲンセールを前に、取材に来ていたとあるゲーム雑誌記者のつけた呼び名が――。

DAI乱舞。

本当に、どうしてこうなったんだろう？

「ダイさん」

その後も俺と潤が歩いていると、いきなり後ろから声をかけられた。潤と二人して振り返ってみると、そこには見知った二人の女の子がいた。

一人は、近くの中学校の制服を着た小柄な少女だ。ショートボブの黒髪がとてもよく似合っている。

彼女の名前は水原綾。14歳で中学二年生だ。苗字からもわかるとおり、潤の妹で、さっき声をかけてきたのもこの娘だ。潤とは中学の頃からのつきあいだが、その伝手で彼女とも「綾ちゃん」「ダイさん」と名前や愛称で呼び合う程度には親しくなっている。俺は四歳上の兄がいるだけなので、綾ちゃんは俺にとって妹みたいな感覚の女の子だ。

もう一人はメガネをかけた、まじめそうなイメージの娘だ。背中まで伸びる緩くウェーブのかかった髪を一本に束ねているのが妙に印象的な感じがする。

こちらの女の子の名前は坂下美咲……といったはず。はず、というのは、彼女には綾ちゃんと一緒にいる時に一度紹介してもらっただけなので、顔と名前が一致しているか怪しいからだ。

たしか綾ちゃんの友達で同級生だったはずなんだが。

「おひさしぶりです、ダイさん」

「ひさしぶり、綾ちゃん。それとたしか、坂下さん……だったっけ？」

「はい。坂下美咲です。お会いするのは二度目、ですよね？」

やっぱり坂下さんで合っていたらしい。いかにも優等生、加えて良家の子女といった落ち着いた雰囲気綺麗な女の子だ。中学校ではさぞ高嶺の花として、男に騒がれているんだろう。

それはそうと、綾ちゃんたちは俺の連れのことを意識的に無視しているようなのだが――。

「おいおい。敬愛すべきお兄さまは無視なのか、マイシスター？」

「あ、兄さん。いたんですか？ 邪魔だからさっさと帰ってください」

ありや、潤が沈んだ。

なにげに潤は重度のシスコンだからな。最近、妹がつめたいと嘆いているし。

そりや中学生ともなれば綾ちゃんにだって、学校で気になる男の一人や二人出てくるだろうし、兄より優先することができてもおかしくないだろうに。

「あのダイさん。せっかくですし、うちに寄ってお茶でもしていきませんか？」

「いや、今回は遠慮しておくよ。友達もいるみたいだしね」

俺は格ゲーのコンボ研究には一切の妥協をするつもりはないが、それ以外の部分については一般的で常識的な考えを持った男だと自負しているのだ。社交辞令くらいはわきまえてるさ。

だけどそんな常識にあふれた俺の考えをあっさりと打ち砕いたのは、当の友達本人だった。

「私はいいですよ。むしろせっかくなので、ぜひ」

「美咲は、こう言ってますけど？」

さすがに二度目を断るのは失礼だろう。俺自身、この後特に用事もないわけだし。

「ん、わかった。それじゃ今回はお邪魔するよ」

「はい」

わが意を得たりと、につこりと笑みを浮かべる綾ちゃん。

「んじゃ、早く帰ろーぜ。今日は妙に寒いから、俺もなんか温かいもの飲みてーし」

お、沈んでた潤が再起動した。

「そうですね。ここは寒いですし、早く帰って三人でお茶しましよ」

「そうだね。綾の淹れるお茶は、おいしいもんね。ケーキも三人分あるし、ちょうどいいよ」

ありやりや、また潤が沈んだ。

……それにしても潤の扱いがひどいな。お前、この二人になんかしたのか？

それから五分ほど歩いて、俺たちは水原家に着いた。沈んだ潤が再起動するまで、十分くらいかかったから、結局は合計で十五分くらいかかってるが。

「兄さん。鍵を開けてください。私は郵便を確認してきますから」
「ああ。わかった」

潤が力チャカチャと鍵を開けているのを手持ち無沙汰な状態で見ていると、綾ちゃんの興奮した声が聞こえてきた。

「あれ？ この封筒……ねえ美咲、美咲ってば。ちょっとこれ見てこれ、もしかしてっ」

そう言っただけ綾ちゃんが手に持っている封筒を坂下さんに見せる。

チラッとだけ見えたその封筒の裏には、次のように印字されているのが見えた。

「VRS開発公社発行」新作VRMMORPGオープンβテスト招待券（四人チーム券）

ゲーム名称：機械仕掛けの箱庭 〈The Mechanical Miniature Garden〉

これが俺たちを苦難と絶望に満ちた長い旅へと誘うチケットにな

るなんて、この時の俺には想像さえできなかった。

1 話（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。
よろしく願います。

2 話（前書き）

本編の第一章の二話目です。
では、どうぞ。

2話

あれから俺は水原家の中に招かれ、今はお茶をいただいている。リンゴのムースをスプーンで一口分すくって口の中へ。甘く優しい味が口いっぱいに広がり、フワリとほどけていく。そこにホカホカと湯気をたてる香りよい紅茶を一口。

なんともいえない幸せな一瞬だ。

「ふう。腕をあげたね、綾ちゃん」

「はい。そりゃあもう、練習しましたから」

「でも綾ちゃんの淹れる紅茶はホント一級品だと思うよ。私が家で紅茶を淹れても、こんなにおいしく淹れられないもん」

「うん。ありがと、美咲」

肌寒いくらいの外で冷えた体が、芯から温まっていきほつと落ちていく。学校やゲーセンでたまった一日の疲れが少しずつ溶けていくみたいだ。目の前の女の子たちも、ふんわりとした緩んだ表情を浮かべている。穏やかな時間だった。

だけどこのゆつたりとした空気はすぐに霧散した。

「そっぴゃ、綾。さっきお前が大興奮してた封筒ってなんだったんだ？」

「……ふう。兄さんはもう少し余韻とか、風情って言葉を理解してください」

あきれた様子の綾ちゃん。坂下さんは、われ関せずといった様子で紅茶をすすっている。

だけど俺も潤ではないが、さっきの封筒については少し気になっではいた。せつかくだし、この際ちよつと聞いてみるか。

「ねえ、綾ちゃん。俺もさっきの封筒について聞きたいことあるんだけど、いい？」

「はい、どうぞ」

あきれた様子から一転。綾ちゃんはにっこりと微笑んでくれる。

「さっき外で偶然『機械仕掛けの箱庭』っていう文字が封筒に書かれているのが見えたんだよね。あれってもしかして？」

「はい。ダイさんの想像している通りだと思います。さっきの封筒の中身は『機械仕掛けの箱庭』のオープンβテスト招待券でした」

「……おいおい、マジかよ。あれって当選率0・1%未満のプラチナチケットじゃねーか」

「そうですね。今回のβテストって、日本枠はたしか合計で五千人だったはずですよ。その中でも一番当選数の少ない四人チーム券を当てるなんて、綾はすごすぎます」

たしかに潤や坂下さんが今言ったとおりだ。

テレビの報道によると、『機械仕掛けの箱庭』のオープンβテストは、アメリカ、イギリス、日本の三国からテストスターを募り、三国合計一万五千人で実施されるらしい。各国とも募集枠は、四千人の個人枠、五百組の二人枠、百二十五組の四人枠の計五千人で共通だ。この当選確率で当たりをひくなんて、幸運なんてありきたりな言葉じゃ言い切れないだろ。

それはそうと。

さっきから隣に座っている潤の機嫌が妙に悪くなってる。しかもたまに、俺の方に殺気混じりの視線を向けてきやがる。理由はなんとなく想像がつくぞ、このシスコンめ。

「そういえば、綾。さっきからお前、俺とダイで全然態度と扱いが違わねーか？」

「そんなの当たり前です。妹に欲情する変態の兄さんと、優しく紳士のダイさんでは、どちらを優先するかなんて自明の理でしょう？」

綾ちゃんの液体チツソよりも冷たい言葉に、不機嫌そうだった潤は露骨に動揺した。

それにしても……よ、欲情って。綾ちゃんがかわいいのはわかるけど、妹相手にそれはさすがにドン引くぞ。しかも坂下さんも紅茶片手にコクコクとうなづいてるし。

もしかしてホントになにかやらかしたのか、潤よ？

とりあえず俺は潤との心の距離を大きく取り、同時に物理的にも若干の距離を取ると――。

「あれは事故だったんだああああああっっ」

いきなり潤が涙ながらに絶叫した。

いや、ホントにお前はいつたいなにをやらかしたんだ？

ヴァーチャルリアリティシステム（Virtual Reality System）という仕組みがある。

VRと通称されるこの仕組みは、全感覚没入型の擬似感覚体験システムのことだ。簡単に言えば、人の持つ五感のすべてを使って仮想空間を体験できる仕組みを指す。

VR自体は2030年代の頃から、アメリカやイギリスなどと共同で、国策として開発が進められてきたものだ。しかしそこで開発された技術は一切が国家機密として、民間に移転されることはなく、あくまで国家のためにのみ利用されてきた。

しかし近年、VR技術の一部を民間に移転せよという世論の流れが生じた。国家予算を使いながら、民間へのフィードバックが無いのはおかしいという財界からの要望が始まりだったらしい。

こうしてあれやこれやの調整を経て、VRを利用する至上初めのゲームとして作られたのが、MMORPGの『機械仕掛けの箱庭』だ。

史上初となるVR使用のゲームに、ゲーム制作上の難易度が高いMMORPGを選択することには、マスコミやら自称専門家から疑問の声が上がったのはまだ記憶に新しい。だが結局はMMORPGのユーザ層の幅広さや、技術的挑戦という言葉が鍵となって開発は継続された。

そして技術的挑戦という割には意外すぎるほどの早々な開発完了、クローズドβテストの終了と発表があるたびに、世間は熱狂したものだ。これからはVRの時代だ、と。

今年の夏頃にオープンβテストの実施とテスター募集について、

大々的な告知とが行われた時には、10〜20歳台の若い世代と、リタイア済みの60歳台以上の高齢者層を中心に日本の人口の5%程度、五百万人にも及ぶほどの応募があっただろう。

「そっぴや四人チケツトなんだよな、それ？」

「ええ、そっぴよ。一緒に行く人はまだ、美咲しか決まってないけど」

「んじや、俺とダイでちようど四人だな」

ん？ おい潤、ちよつと待て。俺を勝手に巻き込むなよ——と、俺がつっこむ前に。

「なんで兄さんが勝手にメンバーに入ってるんですか？」

綾ちゃんがつっこんでくれた。ナイスつっこみ。

「そりや保護者として」

「寝言は寝てから言ってください。できれば自分の部屋でどうぞ」

「寝てねーよ。自分の部屋にも行かねーよ」

「あら違ったんですか？ てつきり今も寝ている状態だと思ったんですけど」

あらら。俺や坂下さんを置いてきぼりで、あつというまに兄妹で口喧嘩が始まっちゃった。とりあえず二人の口喧嘩が終わるまで、あぶれたもの同士で雑談でもしてようか。

「坂下さんは今回のβテストに応募したの？」

「はい。それにもう外れていたのもネットで確認済みです。綾はネットでの当選確認はしてなかったみたいですけど」

なるほどね。そっぴいうことなら、封筒が送られてきた時の綾ちゃんに興奮ぶりも納得がいく。

……と、坂下さんと話しているうちに、水原家の兄妹の言い争いはヒートアップしていた。

「私にだつてチームメンバーを選ぶ権利くらいあります」

「お前だつて坂下さんに聞かずに勝手にチームメンバー扱いしてるだろ。さっきチケツトが送られてきてから、そんな話全然してなかったし」

「美咲はいいんです。元々、一緒にβテストに行けばいいねって言って、二人で応募したんだから。勘違いした保護者気取りの兄さんとは事情が全然違います」

坂下さんは、相も変わらずわれ関せずといった様子で紅茶をすすっている。それにしてもずいぶんとスルースキルが高いな、この娘は。

とりあえずこのまま兄妹喧嘩を続けられるのも困るし、そもそもの話題をふった責任もある。ここは仲裁しておこう。この場合だと潤の援護射撃をする形が、一番手っ取り早いかな？

「女子中学生だけのチームっていうのもあぶないし、保護者っていうのはともかくボデイガードだと思って潤を連れて行くのは、選択肢として悪くないんじゃないか？」

俺の提案に、女の子同士でのひそひそ話が始まった。といっても同じ部屋の中でしていることだ。いくら小声でもうつすら聞こえてはいる。

「ねえ、美咲。どう思う？」

「……うーん、ボデイガード役ってことならアリかもしれない。たしかにいろんな世代の人たちが集まるらしいし。やっぱり変な人とかいると怖いし」

「でも、その兄さん自身が変な人だと思うんだけど」

「なら最後の一人をダイさんをお願いすればいいんじゃないの？」

ボデイガードからのボデイガード役って意味合いも込みで。……きつと綾のことを護ってくれると思うわよ？」

「……うう。もう、美咲ってば。でも、それが一番いいかな。なら、それでいくわ」

どうやらひそひそ話は無事に終わっただけらしい。

俺の隣には受験の合格発表を待つような真剣な様子の潤がいる。

その視線はまっすぐに綾ちゃんに向かっている。

「ふう、わかりました。それじゃ三人目は兄さんをお願いします」

思わずガッツポーズを決める潤。硬い表情から一転、表情が喜び

にあふれている。

「で、最後の四人目なんですけど、できればダイさんをお願いしたいなって」

「俺なんかを誘うよりも、最後の一人は学校の友達を誘った方がいいんじゃないの？」

「まあそうなんですけど。せっかく当選の通知が来たときに居合わせたんですし、なにかの縁だってことでどうですか？」

まあさっきのひそひそ話が聞こえてたから、その誘いは口実だつてことはわかってる。正直に言って信頼してもらえるのはうれしいし、誘ってもらえるのは光栄だとは思うけど。

でも、肝心のゲームがなあ……。

「うーん……。誘ってもらえるのはうれしいんだけど、俺RPGってあんまり好きじゃないんだよね。MMORPGにいたっては、やったこともないしさ」

俺は格ゲーみたいな爽快感を得られるゲームは好きだが、RPGのような作業が中心になるおつかいゲーはあんまり好きじゃない。だから現実感のある格ゲーが楽しめそうなVRS自体には期待していても、MMORPGの『機械仕掛けの箱庭』には興味が薄かった。ただどこで坂下さんが妙に気になる言い回しで話に入ってきた。でもこのゲーム、ダイさんならたぶん気に入ると思いますよ。ね、綾？」

「ええ、そうですね」

「うん？ それ、どういうこと？」

「『機械仕掛けの箱庭』はスキル重視型のMMOなんです。そしてなにより――」

坂下さんの言葉の続きを聞いて、俺の中で急に『機械仕掛けの箱庭』に興味がわいてきた。そりゃなんていっても――。

「習得済みスキルを組み合わせで、格闘ゲームみたいな感じの自作コンボを作れるんですよ」 格ゲーコンボを疑似体験できるっていうんだしな。

結局、俺もオープン β テストに参加させてもらうことにした。

2 話（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。
よろしく願います。

3 話（前書き）

本日（2011/1/1）も三話程度の更新を考えています。
まずは第一弾です。

本編の第一章の三話目です。
では、どうぞ。

3話

2050年12月18日。

冬至も近く、ただでさえ早い日没もとつくに過ぎている時間帯。
俺と潤、綾ちゃん、坂下さんの四人は、『機械仕掛けの箱庭』の
オープンβテスト会場として指定された施設にやってきた。

ここは日本政府が出資しているVRS開発公社が所有する施設らしい。

ちなみにここまでの旅費はVRS開発公社持ちで、全額タダだったのはラッキーだった。

「ようやく着いたな」

「ホントだぜ。まさかこんな遠くにあるなんて思わなかったぞ」

最寄り駅まで電車で二時間。最寄駅から公社が用意した特設バスで三十分。最後に雪降る中を徒歩で十五分。自宅からかなりの距離を移動したことは間違いない。

テスト会場の施設は、外見も、内部もまるでビジネスホテルのような造りだった。今、俺たちがいるところは、さしずめフロントが見えるロビーといったところか。

潤はすでに備え付けのソファでぐったりしている。

「私と綾が受付してきますので、お二人は休んでいてください」

「いいの？」

「はい。途中、私たちの荷物も持って貰いましたし、それくらいはさせてください」

「んじゃ、お願いするわ」

「はい。それじゃ行こ、綾」

「ええ」

二人が受付に行くと俺もどっかりとソファに座り込んで、改めて周囲を眺めてみた。

「これなら朝食付きで一泊七千円ってところか？」

「あ？ なに言ってたんだ？」

「いや。この施設の設備レベルが、だよ」

俺は格ゲーの大会に出るために、たまに他県に遠征することがある。その時はだいたいビジネスホテルに泊まるようにしているから、だいたいの相場を知っているんだ。大会前日にネットカフェとかに泊まって、体調を崩したくないからこそその贅沢だが。

ちなみに他県に遠征すると、ただでさえゲーセン通いで季節に係なく木枯らしが吹いている俺の財布の中身は、ブリザードが吹き荒れる真冬のシベリアとなる。俺の財布に暖かな春が訪れるのはいつになるのやら？

「兄さん、ダイさん」

綾ちゃんが戻ってきた。でも一緒に行った坂下さんがいないな。「受付は奥の部屋みたいです。四人いなきやいけないみたいなので、行きましょう」

「了解。坂下さんは？」

「美咲なら、受付でもう並んでいます。結構な数の人が並んでたので」「よし。んじゃ、行こうか」

綾ちゃんが言ってた通り、受付にはかなりの人数が並んでいた。坂下さんと合流後も、順番が来るまでだいたい二十分くらいは待ったと思う。

それにしても老若男女と参加者のバリエーションは豊かだ。それだけの注目度が『機械仕掛けの箱庭』にはあるってことなんだろう。だけど、やはり10〜20歳代の若い世代と、定年を迎えたりタイア済み世代の比重が大きい気がする。まあ小学生以下は参加不可になったたし、仕事に忙しい世代はなかなか参加したくても、参加できないからだろう。

受付の後には、全員の体型情報などのスキャンを行った。

専用のマシンの中に入り、受付時にもらったログインIDを入力する。するとマシン側が、内部の磁気共鳴を利用して骨格に至るまでの精密な体型情報を取得する仕組みらしい。

今は水原家の兄妹がそれぞれスキャンしている。

「そういえば綾って小柄ですけど、胸は結構あるんですよ。知ってました？」

なぜか坂下さんが、脈絡もなく変なことを言い出した。

「いや、知らなかったけど……どうして、それを俺に？」

「さあ？　なんででしょうね」

だから、その意味ありげな笑みはなんだ？

受付と身体情報のスキャンが終わった後、俺たちは指定された客室に荷物を置き、着替えをしてから夕食のため、食堂へと向かった。ちなみに客室は全員に個室が割り当てられている。

夕食はこの施設でプレイする人たちが全員集まったの合同夕食会が開かれた。

オープンβテスト自体は、明日からクリスマスまで一週間に渡って続くの予定だ。この夕食会は、そのβテスト開始の記念セレモニーを兼ねているらしい。

明日以降のイベント予定だの、ログイン時の注意事項だの、お偉いさんのスピーチだのが延々と続き、最後によやく乾杯。もちろん未成年な俺たちはジュースだ。

それにしても、やつと飯だ。夕食会とやらが始まってから、すでに一時間。おあずけを食らいっぱなしな俺の腹の虫は、すでにグーと抗議し続けている。

そこからしばらくは食欲を満たすことに終始する俺。ついでに隣の潤。

俺らに遠慮してたのか、綾ちゃんが明日から始まるβテストの話題を振ってきたのは、俺がメインディッシュのチキンのトマトソース煮を食べ終わった後。

ちょうど腹の虫も機嫌がよくなってきた頃合いだった。

「そついえば明日、ログインした後ってどうします？　一応、私と綾はモブ狩りしてレベルとスキルを上げつつ、VRの感覚をつかも

うって思ってますけど」

「ま、俺は綾に付いていくのが基本だな。後は状況に応じてテキストだ」

「えー、兄さん憑いてくる気ですか？」

イヤですと言わんばかりの表情の綾ちゃん。潤、なんと不憫なやつめ。ある程度までは自業自得なのかもしれないが。それでも、綾ちゃんの発音が少し変だったような気が……？

それにしても明日の予定か。やりたいことくらいしか決まってるねーしな。

「俺は特に決めてない。コンボ技の練習と実践ってくらいで。だけどせめて明日いっぱいには、『ステップ』や『ジャンプ』の練習を中心にしたいな」

クローズドβテストでのプレイ結果を検索してみたが、『機械仕掛けの箱庭』におけるコンボとは、どうやら『ステップ』や『ジャンプ』を、攻撃系スキルの間に挟んで実行するものらしい。つまり<攻撃スキル ステップ or ジャンプ 攻撃スキル>という一連の動作を、通称してコンボというのだとか。

ということは、だ。

このゲームにおいては、『ステップ』と『ジャンプ』を極めるものは、コンボを極めると言うこともできるだろう。なにことも基本が大事だと言うし。

「練習って……これβテストですよ？ もっと色々と試したり、遊んだ方がいいのでは？」

「綾、諦める。DAI乱舞モードになったら、こいつは止まんねーよ。なんつっても俺らの行くゲーセンで、史上類を見ないほどのガン攻めコンボマニアだしな。前に話しただろ？」

「……ええ。話半分くらいに聞いてましたけど、ホントだったんですね」

綾ちゃんが意外そうな視線を向けてくる。

おいおい、潤。お前は俺のことをどんな風に言ってるんだ？ 俺

はただ、格ゲーのコンボ研究には妥協を許さないストイックな男っただけで、後は平凡で常識的な男だぞ？

「なんだか趣味は速攻、特技は即殺って感じですね」

「ああ、そんな感じ。機会があれば、今度一緒にゲーセン来てみるか？ 普段のダイとは全然違う、まさにD A I乱舞が見られるぞ」

「ああ。それはすごく面白そうですね。今度、ぜひ綾と一緒に見に行きます」

しかも坂下さんも、人聞きの悪いこと言ってる。俺にはそんな趣味も特技も……いや、対戦やってる時は、それが趣味だし特技なのか？

ま、なにはともあれ明日はひたすらステップとジャンプの練習だな。

その後はなごやかに夕食が進んで、今はデザートの間だ。今日のデザートは、イチゴのフロマージュが、温かい紅茶と一緒に供された。

パティシエの腕がいいのか、それとも材料がいいのかは、わからないがホントにうまい。

女の子二人も幸せそうな笑みを浮かべながら食べている。

潤だけは、さっさと食べてしまっただけ無沙汰な様子で、周囲を眺めまわしている。

「それにしても、ここ、すげー警備だよな。V R Sや『機械仕掛けの箱庭』で使われてる技術が、それだけ機密情報だってことなんだろうーな」

「はい？ 警備ってどういう意味ですか、兄さん」

「いや、だってこの建物、監視カメラもすげー数があちこちにあるし。それにこの施設でプレイするのは千人だって言ってたはずだけど、ここに座ってる人数って、明らかに千人以上いるよな。主催者側が用意した座席の数には狂いが無いみたいだし、私服警備員が参加者の中に紛れ込んでるんじゃないのか？ 後は……ほら、あそこ

の窓ガラスもすげー分厚いな。あれって防弾ガラスじゃねーのか？」

「そ、そうだったんですか？」

「ぜ、全然、気がつかなかった……」

「わ、私もです……」

実際、俺なんて普通のビジネスホテルとまったく変わらないなっ
て思ってたのに。警備員なんて制服着て入り口に立ってた人しか気
がつかなかったぞ？

「これでもだてに、MIEに入りたいなんて言っていないぜ。毎日、
そっち方面の勉強をしてるからな」

エヘンと胸を張って、完全にドヤ顔の潤だった。

「ちなみに聞きますけど、兄さんはどうやって勉強してるんですか
？」

「そりやその手の映画を毎日一本は見たり、ゲーセンでガンシュー
ティングしたりしてだな」

あまりといえば、あまりの返答にがつくりと来る、俺たち三人。

「……もういいです、よくわかりましたから。兄さんのガツカリ度
合いが」

だけど後から考えてみれば、この時にもう少し追及すべきだった
んだろう。

VRSなどの研究成果があるだろう研究所とかならともかく、一
介のテスターたちの宿泊施設にどうしてそこまで異常なほどの警備
をするのかを。

これが施設の警備じゃなく、テスターたちの監視だったと気づく
のはもう少し後のこと。

3 話（後書き）

感想をいただけると大変励みになります。
また良い点悪い点の指摘もお願いします。

それではご意見、ご感想をお待ちしています。
よろしくお願いします。

4 話（前書き）

本日（2012/1/1）更新の第二弾です。

本編の第一章の四話目です。

少し短めです。

では、どうぞ。

4話

俺たちは夕食を終えて、部屋に向かって廊下を歩いていった。

後は部屋に戻ってアバターメイキングをする必要がある。明日は朝からゲームにログインする予定だから、今夜中にやらなきゃいけない。

「それじゃ明日は七時半から朝ごはんです。九時からはログイン開始なので、夜更かしして寝過ごさないように注意してくださいね。と・く・に、兄さん、いいですね？」

「わーってるよ」

「ホントですか？ 毎日、寝坊して学校に遅刻すれすれなのに？」

「あれは、たまたまだよ。たまたま」

「たまたま？ 兄さんは毎日の出来事をたまたまって言うんですか？ 一度、たまたまっていう単語の意味を辞書で調べることをお勧めします」

あーあ、まーた始まった。ほとんど日課だよな、これ。

ふう、というため息が隣から聞こえてきた。見ると、苦笑を浮かべている坂下さんだ。スルースキルのマスターランクを極めている彼女が、興味を示すなんて珍しいな。

俺の視線に気がついたのか、坂下さんの方から話しかけてきた。

「あの二人は、なんだかんだいって仲がいい兄妹ですよ。綾が聞いたら、全力で否定しそうですけど」

「ああ、確かにそれはあるな。二人とも打てば響くっていうか、息がぴったり合ってるし」

「ふふ。ダイさんも中々言いますね」

「まーね。これでもあの二人とのつきあいは、そこそこ長いし」

「なるほど。それより明日のこともありますし、私たちは先に部屋に戻りませんか？」

「そうだね」

俺と坂下さんは、口喧嘩に夢中な水原家の兄妹を置いて、それぞれの自室へと戻った。

彼らが明日、寝坊しないことを祈るばかりだ。

部屋に戻った俺は、アバターメイキングをすることにした。

「えーと。なにをどうしろだつて——？」

部屋備え付けのPCに、自分の操るアバター情報を登録していく。とはいっても、受付時に行ったスキャンによって自分の性別や体型といった基本的な情報はすでに登録されていて、変更はできなくなっている。

ここで登録する内容は、主に『髪色』『髪型』『瞳の色』『アバター名称』といった基本的なアバター情報に加えて、個々人のこだわりでステータスに関係ない小物を追加できる『アバターデコレーション』だけだ。

髪の色か……『黒』だな。日本人なら黒以外にない。

髪型か……『短髪ツンツン頭』で。俺が対戦でよく使うコンボの強いキャラは、短く切った黒髪をツンツンに立てていた。それにあやかってみよう。

瞳の色か……『黒』以外にあるか。俺は日本人だ。蒼だの翠だのが似合う人種じゃない。

名前か……『DAI』で。やっぱり使い慣れた名前が一番だ。

デコレーションか……『赤バンダナ』だな。俺が使う格ゲーキャラは、どいつもこいつもみんな赤バンダナを巻いてるし。

「よし。これで決定だな」

俺のアバターの、常識的で平凡な設定の中にキラリと光るセンスのよさに自分でも驚きだ。これで明日の初ログイン時に、他の三人からの賞賛の声があがることは間違いないだろう。

これほどコンボをビシバシ決めるのが似合うアバターは、他にないはずだ。

「んじゃ明日は早いし、今日はもう風呂入って寝るか」

この時、俺は気づいていなかった。

俺が設定したアバターの外見は、ゲーセンで『DAI乱舞』と呼ばれていたキャラの姿そのままだったということ。

翌朝。

七時半の約束だった朝食の時間だが、結局四人全員が食堂に集まったのは、実に八時過ぎとなった。

原因はとある人物の寝坊である。

「だから、あれほど言ったじゃないですか。寝坊はしないでくださいねって」

「んなこと言ってもよおー。ううう、ねみい……zzz」

「こんなところで寝ないでくださいっ」

潤は寝坊をした。綾ちゃんが業を煮やして直接起こしに行くまで、起きて来ないほどの堂々たる寝坊っぷりだった。

おかげで朝から綾ちゃん機の機嫌は悪化の一途をたどっている。坂下さんは、伝家の宝刀スルースキルを発動し、われ関せずといった様子で紅茶をすすっていた。

とりあえずβテスト開始まで時間がないのにちっとも話が進まないの、俺が事情を聞くことにした。潤は相変わらず眠そうだが、俺にはこういう時用の秘策がある。

手順は簡単だ。

アメリカンコーヒー用の大きめカップいっぱい濃い目のエスプレッソを淹れて、ブラックで無理やり一気飲みさせればいいだけだ。後はカフェインさんが仕事をしてくれる。

ということで、実行してみた。

「ガボボ、ゴホゴホオッ……グエ、はあはあ。ダ……イ」

「目が覚めたみたいでなによりだ、マイフレンド。それで早速だが、昨日はあの後何時頃まで綾ちゃんとやりあってたんだ？ 時間がな

いから、こちらの質問には手早く答えるように」

「テ、テメー後で覚え……はい。だいたい一時間くらいです」

当初反抗的な態度を取る被告人だったが、さっきまでスルースキルを発動していた坂下さんが、手際よく二杯目のカップを準備してくれると、素直に質問に答えてくれるようになった。

やっぱり話を聞いてもらうには、こちらの誠意を示すことかなんだ。

「でもそれくらいならアバターメイキングやっても、充分寝れただろうに。実際、綾ちゃんとはちゃんと七時半には集合してるわけだし」「いや、そのアバターメイキングに時間がかかったんだよ。せつかくのVRデビューなんだし、できるだけかつこよくアバターメイキングしてーじゃん」

「それで寝たのは結局何時だったんだ？」

「たしか五時は過ぎてたと思う」

あ、あほか、こいつは……。実質睡眠時間は三時間未満じゃないか。

「それで。結局、満足いくアバターはできたんですか？」

「そりゃ、もちろんだ。かつこよさの粹を極めたって言っても過言じゃねーな」

「……ふう、どうだか」

どこまでも不信感あらわな綾ちゃんだった。

結局、その後はみんな大急ぎで朝食を済ませて、それぞれの部屋へと戻ることになった。

いよいよβテストが始まる。俺は、VRSログイン用の専用スーツに着替えると、ベッド付属機器として置かれているVRSインターフェースをかぶった。

VRS専用スーツとは、外界からの刺激を完全にシャットアウトするための特殊素材で作られているスーツだ。しかもトイレの大小も自動で済ませてくれる優れもの。

これのおかげで、プレイヤーは仮想世界に長時間ログインしても、

オモラシの心配からは解放されている。

VRSインターフェースとは、五感ごと仮想世界にログインするための機器で、フルフェースタイプのヘルメットに似ている。バッテリーを内臓しているためかなり重いが、バッテリーのみでは長時間の使用はできないらしいので、使う場合は電源コンセントが必須だ。

ログイン準備を全部済ませてベッドに横たわり、ログイン開始となる9時を待っていると、やがてピンポンパンポンという軽快なチャイムとともに、放送が流れ始めた。

「九時になりました。これより『機械仕掛けの箱庭』のオープンβテストを開始します。テストの皆様は、順次ログインを開始してください」

放送が流れると同時に、俺はVRSインターフェースの電源スイッチをONにした。

4 話（後書き）

感想をいただけると大変励みになります。
また良い点悪い点の指摘もお願いします。

それではご意見、ご感想をお待ちしています。
よろしくお願いします。

5話 くチュートリアル (前書き)

本日(2012/1/1)更新の第三弾です。

本編の第一章の五話目です。

VR世界『機械仕掛けの箱庭』の内部設定を解説したチュートリアルを含みます。

目を通していただければ、幸いです。

わかりづらい等あれば、可能な限り改善したいと思いますので、ご指摘お願いします。

では、どうぞ。

5話 くチュートリアル

気が付くと、俺は宇宙空間のような場所にいた。

「これが仮想世界か……」

地面を踏みしめている感触はあるけど、どこか頼りない。なにかの拍子に底が抜けて、どこまでも落ちていってしまいそうな恐怖感がぬぐえない。

「ようこそお客様。『機械仕掛けの箱庭』へようこそいらっしやいました」

「ここからはボクたちが案内するよ」

いきなり背後から声が聞こえてきた。それも二人分。

振り返ると、30センチくらいの大きさにデフォルメされた女の子が二人浮かんでいた。

一人は六枚の羽をはためかせ、その頭上には輪っかが浮かぶ天使姿の銀髪の女の子。もう一人は背丈と同じくらいの高さの鎌を持つて、ひどく薄手の黒い衣装を着ている金髪の女の子。

「なんだこれ？」

「私はエルですわ。『熾の天使』のエル。以後、お見知りおきを」

「ボクはリリ。『闇の眷属』のリリ。よろしくね」

なるほど。こいつらはサポート用のキャラか。おそらく『機械仕掛けの箱庭』におけるマスコットキャラという位置づけでもあるんだろう。

「それではお客様のログインIDと、お名前をお聞かせいただけますか？」

「IDは00010345。名前はDAIだ」

自分のIDとアバター名称を告げる。

「認証完了だよ。DAI」

「はい。ログインは正常に完了しました。DAI様」

につこり笑ってログイン完了を告げるエルとリリ。二人の金と銀

に揺れる髪が、なんとも言えないくらい愛らしい。

「それではDAI様は初回ログインなので、これよりチュートリアルをさせていただきます」

「結構長いけど、みんな大切なことなんだ。がんばって聞いてね、DAI」

ここから先は、エルとリリが色々と説明してくれた。正直、覚えきれないほどの量があったけど、なんとか大事な部分については把握できたと思う。

覚えきれなかった部分については、後で潤に教えてもらおうか。

【グランドクエストについて】

『機械仕掛けの箱庭』の主な舞台は、ローストダリアという名前の大陸である。

この大陸には魔物の大発生による破滅の時が、およそ1年後に迫っていた。大陸破滅を阻止するためには、世界中に散らばる13の鍵を集めて、神の城に赴かなければならない。

集めるべき鍵は以下の13種。

『大地の鍵』 『破焰の鍵』 『水煙の鍵』 『烈風の鍵』 『豪雷の鍵』
『霧氷の鍵』 『輝鉦の鍵』 『繁茂の鍵』 『聖光の鍵』 『夜闇の鍵』
『夢幻の鍵』 『死者の鍵』 『人間の鍵』

【プレイヤー情報について】

プレイヤーキャラのアバター名称は普段は非表示となる。

プレイヤーキャラのアバター名称は『フレンド』 『チャットメンバー』 『パーティメンバー』 『ギルドメンバー』 には無条件で開示される。

プレイヤーキャラのステータス/スキル情報は、普段は常に非表示となる。開示する場合には、常にステータス画面からの直接

操作が必要となる。

【パーティとギルドについて】

パーティには『パーマネントパーティ』『テンポラリーパーティ』『クエストパーティ』の3種類が存在する。

『パーマネントパーティ』『テンポラリーパーティ』は人数合計5人まで可能。パーマネント3人、テンポラリー2人のような形の組合せも可能。

『クエストパーティ』の人数制限は対象クエストによって異なる一時的なパーティ。

『ギルド』はギルド作成アイテムによって創立可能。所属人数に制限なし。

パーティノギルド内部でもPKすることは可能。

パーティノギルドの効果は以下の通り。

>>パーティノギルド効果<<

?パーマネントパーティ

パーティメンバー情報共有ノ経験値平等分配ノパーティアイテム共有ノ魔法効果共有ノパーティ割引ノパーティイベント(ノーマル)参加ノパーティイベント(エキストラ)参加

?テンポラリーパーティ

パーティメンバー情報共有ノ経験値平等分配ノ魔法効果共有ノパーティイベント(ノーマル)参加

?クエストパーティ

パーティメンバー情報共有ノ経験値平等分配ノ魔法効果共有ノクエストイベント参加

?ギルド

ギルドメンバー情報共有ノギルドボーナス(ステータスパラメータ)付与ノギルド固有名称保有可能ノギルド拠点保有可能ノギルド共有アイテム保有可能ノギルド維持費が必要ノギルド

内でのみパーマネントパーティ編成可能

【フレンドとチャットについて】

気の合った仲間とはフレンド登録を行うことで、いつでも会話することが可能。同時にチャット登録を行うことで、メールのような文章のやり取りも可能。

【職業について】

職業は、ローストダリア大陸の主要都市にある『転職の神殿』で就くことができる。ただし『転職の神殿』の以外でも、強制的に職業が変わるケースがあるから注意が必要。

職業は『見習い』から始まって、一次職、二次職、三次職の合計4段階存在している。基本的には上位職の方が強いが、上位職への転職は不可逆。つまり新たに就いた二次職が気に入らなくとも、元の一次職に戻ることはできない。また、就いた二次職から、別の二次職に変更することもできない。

高次職への転職条件はレベル依存。なお一次職への転職はレベル10以上で可能となる。

転職のご利用は計画的に。

【アイテムについて】

アイテムはユーザ毎に持つ専用BOXストレージに入れられる。未装備の装備品は合計で9個まで、消費/素材アイテムは99個までの合計108個までペナルティなしで格納可能。

消費アイテムに限り、規定数量以上の数を格納できるが、オーバー個数に応じた敏捷ペナルティ、空腹ペナルティを受ける。アイテムにはそれぞれランクが存在する。

>>アイテムランク<<

? Cheap (安物)

- ? M a s s (量産品)
- ? Q u a l i t y (高級品)
- ? L i m i t e d (限定品)
- ? U n i q u e (一品物)
- ? L e g e n d a r y (伝承品)

また特殊ランクとして以下が設定されている。

>>特殊ランク<<

? G a r b a g e _{ゴミ} : 壊れた装備品など現状では使用価値がないもの。

? Q u e s t (イベント用アイテム) : イベント進行に必要なアイテム。

? P r o d u c t ? ? ? (プレイヤーメイド装備品) :

それぞれプレイヤーが生産系スキルで作成した???のアイテム
ランク装備品に該当。

【装備品について】

プレイヤーが装備できる武器、防具の種類は職業に依存する。
特に装備できる武器の種類については、高次職に向かうに従って数が少なくなる。たとえば一次職で装備可能だった武器が、二次職では装備できないケースが存在する。

初期職の見習いは、あらゆる武器、防具を装備できる。

装備品には耐久度が存在している。耐久度が0になると壊れて装備不可となる。またアイテムランクがG a r b a g e へと変化する。

装備品の耐久度は、金床スキル『装備修復』によって回復させることができる。

【ステータスとレベルについて】

プレイヤーの確認できるステータスウィンドウには、『HP』『MP』『TP』『CR』『ACR』『HR』の6項目が表示されている。

>>項目<<

- HP : 生命力。0になると死亡。

- MP : 魔力。主にマジックスキルを使用する際に使用。

- TP : 技力。主にエキストラスキルを使用する際に使用。

- CR : クリティカル攻撃発生確率。この数値が大きいほど、クリティカル発生率が高くなる。

- ACR : 対クリティカル攻撃防禦率。この数値が大きいほど、敵からクリティカルを食らいにくくなる。

- HR : 空腹率。この値が0になると継続ダメージが発生する。最大値は100。

レベル上昇時には、HRを除いた5項目の値が上昇する。レベルが高いほどクリティカル攻撃の発生率は高く、クリティカル攻撃を食らう確率も下がる。

与ダメージ/被ダメージに直接かわるパラメータ上昇はないため、クリティカルと装備品差を考慮しなければ、与ダメージ/被ダメージに差は存在しない。

【スキルについて】

ユーザの装備品の種類に依存して熟練度が設定されていて、規定の熟練度に達したスキルの習得が可能。（例・片手剣、両手剣、短剣、槍、弓、槌、棒、投石など）

熟練度25ポイント毎に習得条件を満たしているスキルを習得できる。熟練度はスキルポイントを消費して上昇させることができる。

きる（熟練度1PT＝スキルポイント1PT）

熟練度の最大値は1000。ただし職業によって、上限値が存在する（例・見習いは各スキルとも熟練度100までで成長の限界に達する。高次職転職後に100以降が開放される）

スキルポイントはレベル上昇時に、ボーナスポイントとして10ポイントずつ支給される。なおスキルポイントボーナスがもらえるアイテムも存在する。

スキル実行によってシステムサポートによるスキル（剣技、魔法など）の行使が可能。スキル実行なしでは、敵に武器を当てても、ダメージ判定が発生しない。

スキル実行後には一定の硬直が存在する。この硬直を、ベーシックスキルでキャンセルしたものが、コンボと呼ばれるものである。ベーシックスキルの硬直をベーシックスキルでキャンセルすることも可能。

ベーシックスキルには職業に依存する使用回数制限がある。使用回数に達した段階で、強制的にスキル硬直が発生する。硬直後は使用回数は元に戻る。

ベーシックスキルの使用回数は、軽戦士系／盗賊系の回数は多く、重戦士系の回数は少ない。

スキルが発動すると、被ダメージによるノックバック発生などの強制終了以外では、途中でキャンセルすることはできない。

ベーシックスキルとマジックスキル以外は、スキル発動中の武器同士がぶつかると、武器／スキルの差に関係なく双方に等質量のノックバック硬直が課せられる。

スキルの種類は以下の通り。

>>スキル種別<<

- ベーシックスキル：『ステップ』『ジャンプ』。全プレイヤーが使用可能。

- ノーマルスキル：通常のスキル。攻撃／補助／生産

など内容はさまざま。

- エキストラスキル : TPを使用して実行するスキル。
特殊技。

- マジックスキル : MPを使用して実行するスキル。
魔法技。

【コンボについて】

スキルとスキルを、ベーシックスキルで繋ぎ、スキル後硬直なしでスキルを連続実行することを『コンボ』と呼ぶ。『コンボ』は攻撃以外にも、回復、補助、生産の時にも使用できる。

スキルには『効果量』『ダウン値』『コンボ補正率』が設定されている。

『効果量』はスキル単品での攻撃力、回復力などを示す。

『ダウン値』は10を超えると相手が強制ダウンして、再始動まで再攻撃不可となる。強制ダウンしなくとも、対象にスキルを当てなければ、数秒で蓄積したダウン値は0に戻る。

『コンボ補正率』はコンボ成立時、2スキル目以降にかかる効果減少の割合のこと（例・ダメージが100のスキルをコンボして2回当てた場合、コンボ補正率が60%の場合、最終的に与えるダメージは $100 + 60 \div 160$ という計算結果になる）

マジックスキルに関してのみ、杖を装備して『魔法蓄積』スキルによる事前準備が必要となる。（マジックスキルは、発動までに一定の待機時間が必要なため）

スキル/コンボによる攻撃は、当たり方/当たった場所によってもダメージ量の変動する（カス当たりの場合のダメージは少なく、相手の弱点にスキルがクリーンヒットした場合のダメージ量が多い）

【戦闘エリアと非戦闘エリアについて】

街や村の内部は一切の戦闘行動が不可能な非戦闘エリアに設

定されている。ただし強制イベント発生時、例外的に戦闘エリアとなることもある。

逆に街や村の外では、PKを含むあらゆる戦闘が可能な戦闘エリアに設定されている。

非戦闘エリアではあらゆる攻撃系のスキル発動が制限される。非戦闘エリアで補助系スキル、回復系スキル、生産系スキルを発動することは可能。

「これでチュートリアルは終わりだよ」

「……な、長かった」

だから俺はRPGがあんまり好きじゃねーんだよな。大量の作業ゲーをこなすために必要な、膨大な設定を覚えなきゃいけない。

格ゲーの場合コンボ研究に地道な作業が必要なのは確かだが、とりあえず相手を殴つとけばゲームとしては成立する。やはりそこがRPGとは決定的に違う。

「ずいぶん疲れていらつしやるようですわね。大丈夫ですか？」

「いや、頭がパンクしそうだ。つい今聞いた内容、明日には忘れていそうなんだが」

「大丈夫。忘れた部分とか、聞き逃した部分とかは、ステータス画面からチュートリアルの項目を呼び出せば、改めて確認できるから安心してね」

なるほど。それなら潤にいちいち聞かなくてもいいか。メンドイし。

「さて。DAI様にはこれからローストダリア大陸を統べるローストダリア王国、その王都キャンベルにある中央広場へと転移していただきます。そこから正式なプレイスタートです」

「……ブドウ？」

「キャンベルは果物じゃありませんわっ」

あらま。いいつつこみだこと。

リリの方は、そんなエルの様子をお腹を抱えて笑ってる。それにしても、こいつらが出てきた時から思っていたが、ずいぶん感情豊かなAIだ。やっぱり世界の最先端技術ってのは、すごいものなんだな。

「ふう、もういいですわ。さて、それではDAI様。これからあなたには転移していただきます。準備はよろしいですか？」

「ああ、いつでもいいぞ」

「がんばってね、DAI」

「DAI様の進む道がよき旅路となることを、私も影ながら祈っておりますわ」

エルの言葉を最後に、俺の視界は白い霧で覆われていき――。

気がつくと、俺は石畳の敷かれている中世風の広場に立っていた。

5話 くチュートリアル (後書き)

感想をいただけると大変励みになります。
また良い点悪い点の指摘もお願いします。

それではご意見、ご感想をお待ちしています。
よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0221ba/>

機械仕掛けの箱庭 ~ The Mechanical Miniature Garden ~

2012年1月1日21時53分発行